

海上の森に生息するイノシシの撮影頻度指数の変化

愛知県環境調査センター 企画情報部 井城雅夫

はじめに

- ・2018年9月に岐阜県の養豚場で豚熱が発見された。
- ・野生イノシシから、養豚場にウイルスが広がったとされている。
- ・2018年12月に愛知県で野生イノシシから豚熱のウイルスが確認された。
- ・2019年は豚熱によるとみられる野生イノシシの死体が多数報告されている。また、2019年はイノシシの捕獲数が減少している。



- ・海上の森に設置したセンサーカメラの撮影した映像から、海上の森のイノシシについて、豚熱の影響について検討した。

手法

センサーカメラを用いて、イノシシの撮影赤外線センサーで動物を確認すると、自動で動画を撮影する。



カメラは、海上の森に6台設置

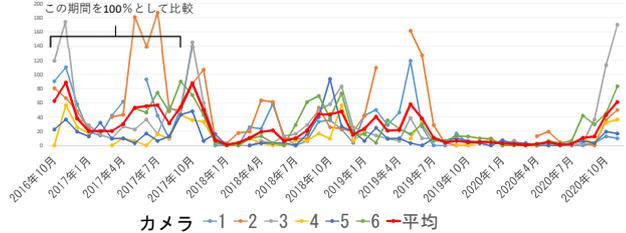


撮影した動画をもとに、撮影頻度指数を求めた。

撮影頻度指数 = 撮影頻度 / 撮影日数 × 100
 撮影頻度は100日当たり直した撮影回数
 個体識別できないため、30分以内に撮影された個体は同一個体とした

イノシシの撮影頻度指数

撮影頻度指数 調査期間：2016年10月から2020年11月

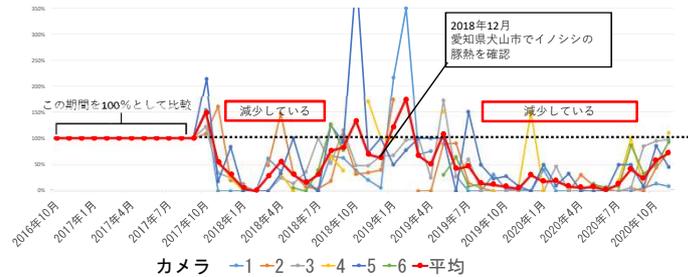


- ・撮影頻度指数は、2017年末から2018年秋に減少しており、2019年夏から2020夏にかけて、かなり減少している。
- ・2020年秋から回復傾向にある。
- ・撮影頻度指数は季節による変動や、イノシシの利用資源の影響が大きく、カメラ毎の撮影頻度指数にばらつきが大きい。また、カメラ毎の欠測などの影響がある。

- 2019年後半から2020年前半の減少
- ・2019年3月から撮影頻度が下がっている。2019年後半の撮影頻度指数の平均でおおむね10%まで下がっており、1年以上継続している。

豚熱の影響と考えられる

2016年10月から2017年9月の各月の撮影頻度指数を100%として、月ごとの撮影頻度指数の変化率で検討



- 2017年末から2018年前半の減少
- ・2017年11月から撮影頻度が下がり、2018年後半から2019年前半にかけて回復している。
- ・鳥獣統計によると、2018年1月から2018年3月までの瀬戸市内の捕獲数は前年と変わらない。
- ・シカやカモシカなどの動物の撮影頻度指数が特に減少していないため、工事やノミなどの捕食者による影響は低いと思われる。

2018年前半の減少については、不明である。調査範囲が狭いため、局地的な個体数の変化と考えられる。今後の調査、検討が必要である。

ウリボウの撮影頻度指数 イノシシの子供は、生まれてしばらくは、縞模様がありウリボウと呼ばれている。

2017年のウリボウの撮影頻度指数を基準として、変化率を比較



孤独なウリボウ1頭の特定の個体が、1か月間連日のように撮影された。この個体を除けば、2018年のカメラ5の撮影頻度は0になる。

- 2018年からウリボウの撮影頻度の平均は減少している。
- 2020年は、すべてのカメラでウリボウは確認されなかった。

2019年、2020年は豚熱の影響で、繁殖可能な個体の著しい減少があったと推察される。

ウリボウの月ごとの撮影頻度指数



- ・イノシシは通常春に産するため、ウリボウがよく確認されるのは春から初夏にかけてとされている。
- ・2018年は夏から秋にかけて撮影されている。
- ・繁殖時期が遅れていることから、この地域のドングリなどの前年秋のえさの量が少ないなど、何らかの環境の影響があったことが推察される。

まとめ

- 海上の森のイノシシについて
- ・2017年末から2018年前半の撮影頻度指数の減少は、イノシシのみに影響する生息環境の変化があったと推測される。
- ・2019年後半からの減少は、豚熱によるものと考えられる。
- ・豚熱の第2波の影響も考えられるので、今後も調査の必要があると考えられる。

- センサーカメラを用いた野生動物の調査について
- ・近年イノシシ等野生動物が増えており、農業被害や住宅地に侵入による人的被害、豚熱の養豚への感染などが問題になっている。
- 野生動物の個体数を管理する必要があり、有害鳥獣駆除などにより個体数の減少を目指している。個体数の把握や、その変化を把握し、個体数管理の効果を確かめる必要がある。

- ・センサーカメラによる調査は、フィールドサインによる調査や捕獲による調査に比べて、専門的な知識や経験を必要とせず、野生動物の増減の傾向を把握できるので、野生動物の個体数管理のための指標として活用しやすい。